法政大学

「課題解決先進国日本からサステイナブル社会を構想するグローバル大学の創成」を大学のグローバル化の基本構想とする法政大学。海外に目を向けた取り組みは、経済的な補助、教育体制の拡充、海外のパートナー大学との連携など多岐にわたります。世界に羽ばたく人材育成にかける思いと2つの留学スタイルについてお話を伺いました。

■ 川名玲央 さん

■ 福田好朗 先生

■ 松丸晴香 さん

法政大学国際文化学部の留学への取り組みについての特色を教えていただけますか？

■福田先生

本校の留学にはいくつかの種類があります。古いもので 1970 年頃からはじまった交換留学制度です。本校の学生を海外の学校に送ると同時に、海外からの学生を日本に招く。いわゆる一般的な交換留学ですね。

今から40数年も前から海外に目を向けていらっしゃったのですね。

■福田先生

はい。時代時代に合わせて、より合理的な留学の仕組みを作ってきました。長く続けてきた活動ゆえ、海外との連携も充実したものになっておりまして、現在、世界 34 の国や地域のおよそ 215 大学と学術一般協定や学生交換協定を結んでいます。

世界のいたるところで法政大学の学生は貴重な体験を得ているのですね。

■福田先生

その通りですが、提携校が多いのはあくまで留学先の選択肢が広がるということ。私たち法政大学では、学生にとって本当に有益となる留学とは何かを精査しながら、適宜新しい留学制度を作り上げてきました。それらは理系でも文系でも利用できるものとして確立されています。

■川名さん

留学や語学の習得を希望して入学を決めたという同級生も少なくありませんよ。

■福田先生

国際文化学部では、留学を必修としていることも特徴です。在学中に必ず世界に行くというところ

まで設定している大学はそう多くないと思います。また、大学全体で実施しているインターンシップ、ボランティア、短期の語学研修制度などもあり、結果的に海外との接点を在学中に持つ学生はトータルで年間 1000 人はくだらないでしょうか。毎年の入学者が 7000 人から 8000 人。8 人のうち 1 人が世界に足を運んでいることになります。

留学を通じて世界に飛び出す学生に期待することは何でしょうか？

■福田先生

海外に行くことは、これまで経験のない困難な領域に飛び込んで自分を磨く事だと思っています。語学、文化、習慣、コミュニケーションの壁を乗り越える体験を通じて鍛えられる挑戦心や精神力は、学問の領域においても、卒業して社会人になった場合でもきっと役に立つと思っています。

■松丸さん

それは実感します。留学中は毎日が挑戦というか、自分自身の底力が試されている感じでした。

■福田先生

留学先の文化を理解すると同時に、自分の置かれているポジションや実力を目の当たりにする体験は日本ではできないと思っています。

■川名さん

先生はどうしてできないとお考えですか？日本には多くの留学生が来ており、国際交流という面では、十分すぎるほどの環境だとは思いますが。

■福田先生

自分自身を俯瞰、あるいは客観視することは大学の授業や環境だけでは育たない。やはり非日常の体験をしないと難しいと思っています。そういう意味から、できれば海外に行って、今までの経験や考えを脱ぎ捨てて、いままでよりも一回り大きくなって帰ってきてほしいと考えています。

大変な数の学生が海外に行ったわけですが、帰国後の学生の様子は先生から見ていかがでしょうか？

■福田先生

二通りあるように感じます。ひとつはいい意味でのショックを受けて帰ってくる学生。もう一方は、非常に積極性が増して出国前以上に元気になって帰ってくる学生ですね。

■松丸さん

最初は言葉が通じなくてショックを受けるけれど、次第に慣れてきてもう帰国したくないというほど、なじんでしまう学生もいますよね。

■福田先生

そうだね。いろんなケースを私も見てきましたが、それだけ海外での体験は影響を与えるということかもしれませんね。

帰国後は海外に対する意識が強くなったりするのでしょうか？

■福田先生

そうですね。少なからずあると思います。例えば就職や何かで海外志向に方向をとるようになる学生もいますからね。ある国でボランティア体験に参加した学生は、将来の活躍の場として国連などの国際的機関を視野に入れるようになりました。

■川名さん
そういうケースは多いと感じます。留学先で共に勉強する他国の学生に感銘を受たりして、視野がどんどん広がりますからね。
■福田先生
海外というフィールドで自分の存在意義を示したい。そんな意義を持って海外の企業に進んだ人や、多くの大使館にアプローチして、結果的にアフリカ大使館の職員になっている人、あるいは日本のアメリカ大使館の事務官になっている人などもいますね。
■松丸さん
すごいですね。その行動力を私も見習わないと。
■福田先生
そういう人たちは、もともと頑張っていた語学の力を試しつつ、海外の人たちとのコミュニケーションでさらに自信をつけるというかたちで戻ってきているようだね。あとは、あえて海外の大学院に進む学生も。本音は法政大学の大学院に進んで欲しいですけどね。

それでは代表的な留学制度を教えていただけますか。
■福田先生
わかりました。それでは数ある制度の中から２つご紹介します。ひとつはスタディ・アブロード（SA）・プログラムで、もうひとつは派遣留学制度というものです。

まずは SA プログラムの特徴から伺います。実際に SA プログラムを活用した川名さんには、現地での学びなどについて教えていただこうと思います
■福田先生
わかりました。先ほどお話しました通り、まず SA プログラムは国際文化学部をはじめとした、いくつかの学部において必修となっていることが特徴として挙げられます。次に「どこに行って何を学ぶか？」などの目的は学生自身が決定すること、そして最後に、留学にかかるお金については大学側が十分な支援を行っている。この３つがポイントとなるでしょうね。

学生が主体となる自由度の高い留学制度の印象を受けますが、どの国を選んでも良いということですか。
■福田先生
国際文化学部の場合、地域で言うと、アメリカ、イギリス、フランス、オーストラリア、中国、カナダ、スペインをはじめとした 10 カ国、16 の提携学校から選ぶことになります。また、SA プログラムは２年生の秋ごろに数ヶ月留学する長期 SA と夏休みに一カ月学ぶ短期 SA があります。川名君はフランスに行ったんだよね。
■川名さん
はい。
■福田先生
では具体的な体験談を川名君から話してもらおうかな。
■松丸さん
フランスですか、いいですね。きっと素敵な体験をなさったんでしょうね。どのくらい滞在していたんですか？
■川名さん
去年の秋からスタートして５か月弱くらいです。つい先月帰ってきました。

体験談と共に留学先の選定方法や学びのテーマをどのように決定するかもお話しいただけますか？

■川名さん

わかりました。まず留学先は「言語」から決めていきます。つまり英語圏のどこかにするか、あるいはフランスやロシアなどの固有の言葉を使う国にするかということですね。

■福田先生

補足すると言語は英語・中国語・韓国語・スペイン語・フランス語・ロシア語・ドイツ語の７言語があります。学生の希望でいずれかを選んだ後、留学する提携校を決めていきます。フランスやドイツなどだと大学は絞られてきます。大体１校とか２校になるでしょうか。

■川名さん

英語圏を選択した友人は、アメリカ・オーストラリア・ニュージーランド・カナダで迷っていましたね。私もアメリカは魅力的に感じましたが、ヨーロッパ方面を選べば、留学中の休暇に別の国へも行けるのでフランスに決めました。

■松丸さん

なぜフランスだったのですか？

■川名さん

まずフランスは観光産業が世界で一番進んでいて、１年間に訪れる観光客の数が世界で一番多い国なんです。その理由を学びたいと思ったのが最初のきっかけだったのですが、フランスのことを色々と調べているうちに学びのテーマは変わりましたね。

■松丸さん

どんなテーマに興味がわいたのですか？

■川名さん

フランスでは女性の社会進出も目覚ましく、さらに日本よりも高い出産率であることを知りました。仕事と子育てを両立する女性を支えるフランスの社会。ここ日本ではなかなか叶うのが難しいことを、フランスはとても上手にやっていることに関心を持ち、その仕組みを学ぶことにしました。

■福田先生

テーマ設定については、留学先の大学の学部で実施されているカリキュラム、授業内容をホームページなどで見て、自分のやりたい勉強がそこで実現できるかどうかを判断していきます。

■松丸さん

結構自由度が高いですよね。政治から社会、文化まで、本当にテーマには限りがないですから。

テーマを自分で見つけるところから、留学は始まっているというわけですね。

■福田先生

そういうことになりますね。高校で行われる留学は、ある程度テーマや目的が設定されていますが、大学では一変して、自分で全て決めていきます。高校の時から興味を持っていることにチャレンジしても結構ですし、大学の所属学部に関連するものでもいい。あるいは、法政大学では勉強できない内容だけど海外の大学なら授業をやっているから海外に行ってみたい。そんな個人的な理由でも全く問題ありませんよ。大事なのは自分で決めて自分で動くことなのですから。

フランスでの滞在について教えてください。女性進出の仕組みを知るという目的は達成できましたか？

■川名さん

女性の社会進出と子供の出産率が高いのに関しては理解を深められました。まずフランスは育休を３年まるまる取れるのです。さらに、取っている間も会社などに別に影響なく、戻った時に同じポ

ジションに戻れるわけです。こういったことが法律で決まっているので将来のキャリア形成や経済的な不安を感じることなく、仕事と子育てを両立できるのだと思いました。

■松丸さん

出産３人目から補助金が出るのってフランスでしたっけ？

■川名さん

よく知っていますね。確か２人以上産むと補助金が増えるだったかな？そういった制度があるから１人産むなら２人、２人産むなら３人、４人の方が、かえって経済的な面で助かる場合もあるそうですよ。街に出てみると、ぞろぞろと小さな子を引き連れているお母さんの姿も多くて、ちょっとしたカルチャーショックでしたね。

なんという大学で学んだのですか？

■川名さん

西部カトリック大学の付属の語学学校で過ごしました。

■松丸さん

授業はさまざまな国々から来ている留学生と受けるのですか？

■川名さん

そうですね。アジア、ヨーロッパ、アメリカからの留学生がたくさんいました。非常に国際色豊かでしたね。授業などでも先生が出すテーマについてディスカッションする時も、国ごとに考え方が違っていて面白かったですね。

もともとはフランスの観光について学びたいということでしたが、それについても収穫はありましたか？

■川名さん

フランスはヨーロッパ旅行の起点となりやすい場所にあることが、まず大きなアドバンテージなのかな？と。ヨーロッパ周遊の場合、だいたいイギリスの空港かフランスのシャルル・ド・ゴール空港にまず行くのが一般的のようです。必然的にフランスに足を運ぶ人が多いのではないかと思いました。

■松丸さん

フランスの観光地ですぐに思い浮かぶのはパリですね。確かに一度は行ってみたいと思わせる魅力的な場所ですからね。

■川名さん

日本人にはパリのイメージが強いのですけど、外国人の方は田舎のほうで過ごすことを旅の目的とする人も多いようです。とりあえずパリの空港を経由するけど、滞在は田舎のほうで２週間の長期休暇を過ごすといった感じです。

ホームステイ先のホストファミリーや他国からの学生との初顔合わせの印象はいかがでしたか？緊張しましたか？

■川名さん

実はフランス語がそれほど話せなくて、満足なコミュニケーションはできなかったんです。

■松丸さん

学生もホストファミリーもフランス語ですよね？

■川名さん
ホストマザーが多少英語を喋れる方だったので、フランス語を話しつつ、どうしても伝わらない時は英語でなんとか。でも学校はずっとフランス語なので。
■松丸さん
がんばって乗り切ったのですか？
■川名さん
がんばりというか気合いですね。
■福田先生
フランス語は大学に入ってからやったの？
■川名さん
はい。
■松丸さん
すごい！語学習得のセンスがありますね。

留学を通じて得たもの。自分自身の変化について教えてください。

■川名さん
留学中にアメリカの大統領選挙とフランスの大統領を決める予備選挙みたいのもありました。アメリカ人が見たフランスの選挙、フランス人が見守るアメリカの動向、肯定的な意見もあれば否定的な意見もある。いろいろな見方があることに触れて、情報を多面的に見る力を意識するようになりました。あとはコミュニケーション能力ですね。ジェスチャーや表情もつけながら伝えるコミュニケーションはやはり現地ならではでした。

今回の留学は将来役に立ちそうですか。

■川名さん
勉強にせよ、向こうでの生活では、成功や失敗は関係なく、まずやってみるという場面も多いわけです。その行動力は社会人になって仕事をすることになった時に役に立つと思います。

ありがとうございます。SA プログラムについてよくわかりました。それでは、もうひとつの派遣留学制度について教えてください。

■福田先生
簡単に言うと派遣留学制度は、およそ 56 ある協定校に一年間留学するというものです。全学部が対象の制度で３・４年次に実施することができます。タイミングとしては、春学期で入学できるところと秋学期で入学できるところがありますので、向こうの学期制で選択をします。行く大学や学びのテーマ設定については、先ほどお話したＳＡプログラムとほぼ同様。学生が主体となって取り組んでいくことになります。
■松丸さん
費用面のサポートが充実していることも法政大学が留学に強いと言われる理由だと思います。
■福田先生
学内での選考試験に合格した派遣留学生全員に返還不要の奨学金が支給されます。留学中の授業料は、法政大学の学費を通常通り収めることで全額免除、留学先の大学で取得した単位は帰国後に 30 ～ 60 単位を限度に法政大学での単位として認定されます。
■川名さん
この制度を上手に活用している学生も多いですよね。

■福田先生
そうだね。やはり費用面での負担が比較的軽いことが理由だと思います。留学先によって異なりますが 70 ～ 100 万円の奨学金が必ず出ますので、行先を厳選すれば、留学費用そのものの自己負担を 0 円で済ませることもできます。もちろん法政大学への学費は別ですからね。念のため。

かなり恵まれた制度ですね。その分、留学する学生の選考も厳しいのでは？

■福田先生
一年間という長期ですから、SA プログラムやその他の制度に比べると確かにハードルは高くなります。選考に当たっては相手方の大学が要求する条件、例えばフランスだとどのくらいの会話力があるのか。英語なら TOEFL で何点以上といったこと。それをクリアした上で、私どものほうで面接を行いながら選抜します。非常に人気のある制度ではありますが、各大学に 2 人から 3 人くらいしか派遣できませんので、成績が良くて志望動機がしっかりしている学生が優先的に海外に赴くことになります。

それでは派遣留学制度でアメリカに行かれた松丸さんにバトンタッチしましょうか。まずは派遣留学の目的から教えてください。

芝生の緑が映える中庭は学生たちの憩いの場

■松丸さん
まずは語学力の習得ですね。あとは、国際経営戦略論ゼミに所属しており、海外で国際経営の知識を深めたいと思ったことも理由です。さらには、日本の大学では学べないダンスや陶芸なども学んでみたいという気持ちもありました。

■福田先生
想像していた通りの留学でしたか？

■松丸さん
想像よりも遥かにリーディング量が多かったですね。1 つの授業で、明後日までに 40 ページ分の資料を読まないといけないことも。あとは、全ての学生が手を挙げて発言すると思っていましたが、実際は半分程度。これは意外でしたね。学校の仕組みの部分では出席点や小テストが頻繁にあり、毎回授業に出て継続的に頑張らないと良い成績を得ることは難しいことです。そのためか、現地の学生は図書館をよく利用しており、深夜まで勉強している人も多くいました。日本のように期末テストで一発勝負というわけにはいかないんですね。

■川名さん
現地の学生との交流も盛んでしたか？

■松丸さん
アメリカの学生は、大学を「学ぶところ」として割り切っています。例えば、グループワークでは空き時間にメンバーで集まることがよくありますが、そこではグループの話し合いが終わると即解散です。授業も同じで、チャイムと同時に皆教室から出て行きます。授業に対する臨み方は違うと感じました。

■福田先生
日本の大学とは全く違うから驚いたでしょう。

■松丸さん
軽いカルチャーショックといえばそうですね。しかしサークルなどの授業外での活動ではとてもフレンドリーで仲良くなりやすい環境でした。勉強と遊びをはっきり分けられる人たちなんだな、と。

■福田先生
留学前に準備したことはありましたか？
■松丸さん
オンラインのスカイプ英会話教室に数ヶ月登録し、活用していました。そこで簡単な英会話を練習し、添削してもらうことで英会話の土台を作ることができたのではないかと思います。もともと法政大学が語学に関する授業が充実しているので、それほど準備したという感じではないですよ。

語学の授業についての話題が出ました。法政大学の語学教育の特徴があれば教えていただけますか。

■福田先生
ネイティブの先生による英語の強化プログラム「ERP（English Reinforcement Program）」の実施のみならず、英語のみの環境で授業を行う科目も 73 ほどあります。英語に触れるだけでなく会話のツールとして使いこなすための取り組みは充実していると思います。
■川名さん
日本にいながらも、英語にどっぷり浸かることができると思います。海外を疑似体験している感覚です。
■福田先生
それともう一つ。「G ラウンジ（Global rounge）」というコミュニケーションスペースもあります。ここではネイティブの先生方のみならず、海外からの留学生との会話を楽しむことができます。学生主体のイベント企画などを話し合う場所としても利用されているようで、いつもいろいろな言語が飛び交う非常にユニークなスペースなんですよ。

松丸さん。留学後の変化について教えていただけますか。

■松丸さん
より少人数での授業を好んで履修するようになり、積極的に発言するようにもなりましたね。それと自分らしさを大切にするようになったと思います。留学前は人と違うということを自分の中で否定しがちでしたが、留学から帰ってきた今、人との違いが私らしさである、といったように受け入れられるようになりました。また、海外のメディアにもよく目を通すようになり、日本だけでなく世界で何が起こっているのかということに興味を持つようになりました。
■福田先生
一度でも海外を経験すると、人間的な面で大きくなれます。そういった体験を求める学生は法政大学にたくさんいて、SA プログラムに参加した後、派遣留学制度を利用して再び海外に行く人も少なくありません。その中にはさらにインターンシップ制度で海外の会社で就業体験をする人もいますね。
■川名さん
1 人で 3 回くらい海外体験を楽しむわけですね。僕もそのつもりでがんばります。

最後に留学に興味を持っている高校生へのメッセージをお願いします。

■福田先生
留学というものが特別なものではなくなってきていると思います。海外に何かがありそうだと思えば行けばいいと考えています。私たち大学はそういった思いを、仕組みや留学費用といったさまざまな部分で今後もサポートしていきますので、ぜひ法政大学で留学の夢を叶えると共に、広い視野で物事を見られる人へと成長し、どんどん社会で活躍してほしいと願っています。

新入生向けクラブ勧誘会の Japan Club ブースで友達と

■松丸さん
学生目線の制度やサポートについては、他の大学に進んだ友人も注目していますね。
■福田先生
あと、法政大学は就職率が極めて高い大学です。年によって前後しますが就職率は98%を誇っています。また、自由な校風であることも法政大学の良さです。勉強は当然のこと、サークル活動などでも自分のやりたい事がしっかりできるので、充実した学生生活を送ってもらえるでしょう。

■川名さん
国際文化学部では、SA プログラムが必修であることが良いと感じます。厳しい入試を潜り抜けて大学に入っても、1 年生の学生生活のうちにだんだん余裕が出てきて、なんとなくピリッとしなくなることも。でも国際文化学部は SA プログラムが目の前に控えているので、語学を学んだり準備もしないといけません。学びに対して真剣にならざるを得ない環境が自然とあることが良いと思いますよ。貴重な学生時代をなんとなく過ごすということは絶対にないと思います。
■松丸さん
将来的に留学をするなら、リスニング対策が重要です。特に TOEIC や TOEFL のリスニング対策ではなく、現地の人の話していることを理解するためのリスニング対策だと思います。なぜなら留学した当初は、教授が何を言っているのか聞き取れず、宿題が何なのかもわからなかったため授業後に教授室に行くことがよくあったからです。おすすめのリスニング対策は英語のドラマを見ることです。できれば英語音声英語字幕がベターです。また、海外の YouTuber のチャンネルを見ると最新のスラングやネイティブのよく使う言い回しが聞けるので非常に参考になると思いますよ。

●インタビューに答えていただいた方々●

■福田好朗先生

デザイン工学部教授／法政大学副学長

私立国学院久我山高等学校出身。中央大学理工学部卒業。1989 年神戸大学論文博士（工学博士）。1971 年財団法人機械振興協会（1996 年まで）を経て、1996 年法政大学工学部教授、2009 年同デザイン工学部教授（現在に至る）。2007 年法政大学大学院委員会議長（2009 年まで）、2011 年常務理事、評議員（2014 年まで）等歴任。2014 年グローバル教育センター長、2015 年法政大学副学長（現在に至る）。

■川名玲央さん

私立郁文館グローバル高等学校出身。法政大学国際文化学部国際文化学科 2 年生（2016 年度取材当時）。

高校時代にニュージーランド・ダニーデンへの留学プログラムに参加。その時の体験によって海外への関心が高まる。法政大学の SA プログラムで昨年秋よりフランスに留学、約 5 か月の滞在を終え今年初頭に帰国。さらなる語学力の習得と様々な国の文化に触れるために、次の留学プランを計画中とのこと。

■松丸晴香さん

私立江戸川女子高等学校出身。法政大学経営学部経営戦略学科 4 年生（2016 年度取材当時）。

語学力の習得と国際経営の知識を深めたいと、派遣留学制度を活用してアメリカペンシルベニア州 West Chester University へ 10 か月の留学を体験。留学を通して変わったことは、より少人数の授業を好んで履修し、積極的に発言するようになったこと。そして、人とは違う意見や考え方が自分自身にあってもそれを否定するのではなく、自分の個性だと思えるようになったことだという。